

研究の周辺

南薫造『従軍日記』の図版検証

——戦前絵葉書的美術史拾遺——

彭 国 躍

キーワード：軍事郵便 従軍画家 南薫造 小林万吾 鈴木貞三

一 はじめに

戦時中、多くの画家たちは戦争記録画を制作するために、陸軍省や海軍省の嘱託を受け従軍し、中国大陸や東南アジアなどに渡っていた。名前が記載された文献による統計だけでも従軍・出征画家の数は一九三八、三九年の二年間で二三五名にもものぼっていた⁽¹⁾。戦後、戦争責任や戦争協力の問題が浮上し議論されて以来、多くの画家たちはその歴史について口をつぐむようになった。当事者たちがすでに亡くなった今ではその封印された歴史がそのまま闇に消える可能性がある⁽²⁾。従軍画家たちの活動に関する史実の発掘と整理は美術史だけでなく、現代史の研究においても次第に重要性が増してきたと言える。

「南薫造『従軍日記』」(以下『日記』と略称)が藤崎(二〇〇五)⁽³⁾により公開され、それまで不明だった従軍画家の活動や取材経路などに関する詳細な情報が一部明らかになった。『日記』では同行した他の画家の動きまで詳細に記録されていたため、その発見と公開は史料として重要な意義を持っている。

藤崎(二〇〇五、一八頁)の解説によれば、「従軍後の南は、東京の自宅に戻った翌日に陸軍省への帰朝挨拶をすませ、早速に中国で画題を得た作品に着手。……用務の一つであった絵葉書用の素材は、同年末に陸軍省に提出しているが⁽⁴⁾、図版等の詳細は不明である」⁽⁵⁾。南薫造(一八八三～一九五〇)に限らず、従軍画家たちが提出した原画は戦時の空襲や混乱の中でその多くが行方不明となった。ところが、戦前軍

事郵便用の絵葉書がかなりの枚数で発行され使用されていたため、図版を特定するには、残存の戦前絵葉書が一つの重要な手掛りとなる。

そこで、筆者は、個人的に所蔵している九三名の従軍・出征画家が描いた戦前絵葉書（五一六枚）の中から、南薫造の『日記』にかかわると思われる図版を抽出し、誰がどこで何を描いたかなどについて検証したいと思う。

二 『日記』と戦前絵葉書の照合

南薫造は、一九三九年に五五歳で東京美術学校の教授在任中、陸軍省嘱託の従軍画家として中国に渡った。一緒に従軍辞令をもらった画家の中に同美術学校教授だった小林万吾（一八七〇～一九四七）もいた。当時六八歳の小林には、同美術学校卒業生で二七歳の鈴木貞三（一九一二～二〇〇九）が助手として随行していた⁽³⁾。公表された『日記』は、一行が中国に赴いた四九日間（一九三九年三月二九日～五月一日）の動向を記録したものである。したがって、本論では、南薫造、小林万吾と鈴木貞三の三人に絞る、その取材経路を特定し、それに関連すると思われる戦前絵葉書との照合作業を通して、それぞれ従軍用務の一つとして提出された絵葉書の図版を確認し、これまで知られなかった史実の一端を明らかにする。

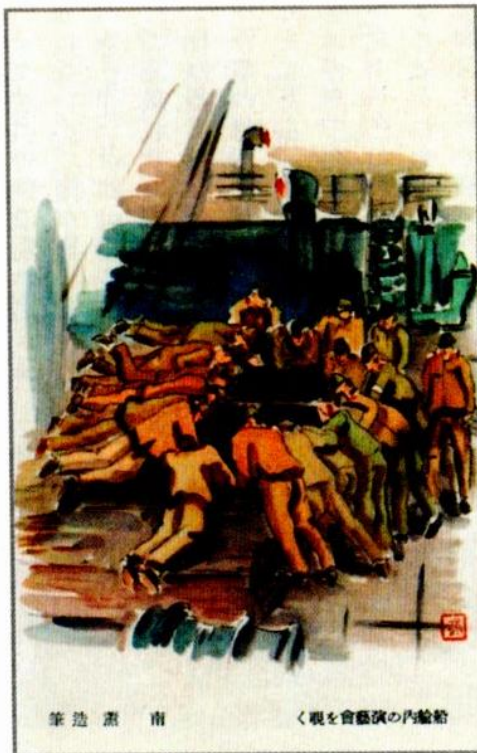
二一 南薫造

南一行は一九三九年三月三十一日に広島宇品港から出港し、

四月三日に上海に上陸した。四月三日の『日記』には次のように記されている。

「昨夜催された兵隊の演藝会も半数の船暈者出来の為に全力を盡し得なかったそうである」^(二〇頁)⁽⁴⁾

筆者は所蔵の軍事郵便の中から南薫造が描いた図版を六枚発見した。五枚は絵葉書に、一枚は葉書入れ封筒の表紙裏に印刷されている⁽⁵⁾。絵葉書の中の一枚は①で、船倉内の演芸会をのぞく兵士たちの姿が描かれている。



①

四月七日に南一行は蘇州に向かった。その日の日記には次のような記述がある。

「麦の緑と菜種の花の黄の間を走り、ミレの画く農夫男女の点々せるを眺め、青空を映すクリークの数々、其れに架けられた小橋、桃花咲く美しい小部落を過ぎる。非常な明るさ。壊された小停車場を過ぎて崑山に停車。新聞で能く見た地点である。鈴木君は此処の戦で其の同級生を失ったと云ふ(6)。小山(即ち崑山)が右手十町位の所に見へ、破壊された塔が其の頂に見へる。既に修復に取り懸って居るのでは無いかと遠くから眺められた」(二四頁)

そして日本に帰る二日前の五月一四日の日記には、次のように記されている。

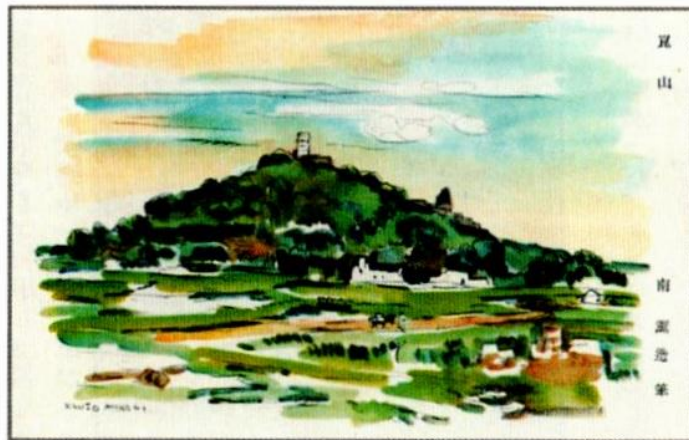
「崑山へ行き度いと準備をしたが松林君が来ると云ふので崑山行を中止して待つ。甚だ遺憾であったが後に聞けば崑山附近は全く安全と云ふわけに行かず中止する方が宜かったとの事であった」(四八頁)

『日記』の中で崑山という場所に触れたのは以上の二ヶ所だけである。五月一四日には都合により崑山行きが実現しなかった。

残り五枚の図版中四枚は中国風景、一枚は日本国内の風景が描かれたものである(7)。中国風景の内一枚は②「崑山」である。画面中央には崑山という山が見え、その頂上には、『日記』に記された「破壊された塔」らしい建築物が描かれ

ている。『日記』には列車が崑山に停車している間の活動についての具体的な記述はないが、南が崑山を見たのは『日記』記載通りの四月七日の蘇州行きの中停車の時だけだったとしたら、絵葉書②は停車中の車窓からスケッチしたもの、またはそれをもとに後ほど水彩で描いたものの可能性が高い。南一行はその後蘇州から上海に戻り、四月一三日に杭州に赴いた。その日の日記には次のような記述がある。

「二時三十分過ぎ杭州駅に着く。……其の案内役の伍長に頼んで我々三人も同乗する。西湖を横断する長堤を過ぎ、……鉛筆のスケッチなどして再びトラックに乗って西湖の堤に戻って□折し雲林寺に行く」(二九—三〇頁)

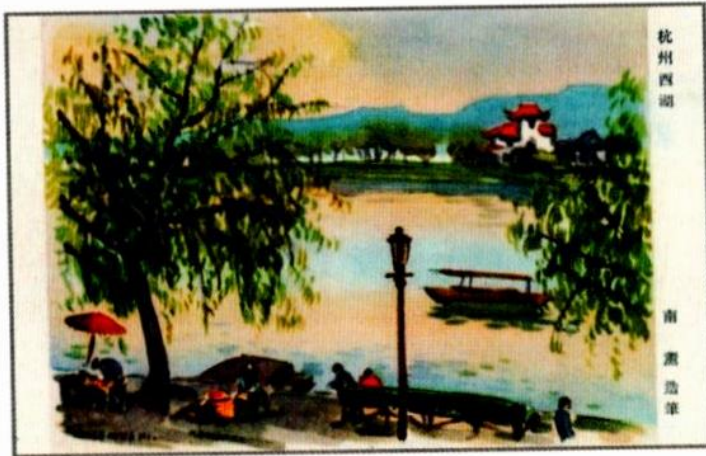


②

翌日の日記にも次のように西湖でのスケッチについて記されている。

「四月十四日。雨。夕方より曇天。起床バルコニーをのぞけば雨。雨の中の□の新緑は亦た和やかで美しい。バルコニー欄干も入れて湖中の橋（断桥）を遠見に水彩で画く……宿に帰って五階の#12を続く。浴後室前で湖面を水彩スケッチする」(8)

南一行の杭州滞在は一三〜一九日の一週間である。一五、一六日の日記にも西湖周辺地域でのスケッチに触れている。南が描いた三枚目の絵葉書は③「杭州西湖」である。画面の中央湖面に長堤が見え、堤上の並木の間に向こう側の白い湖面がのぞいて見える。手前の湖畔にベンチで休む人や楊柳の下の小売りの姿が



③

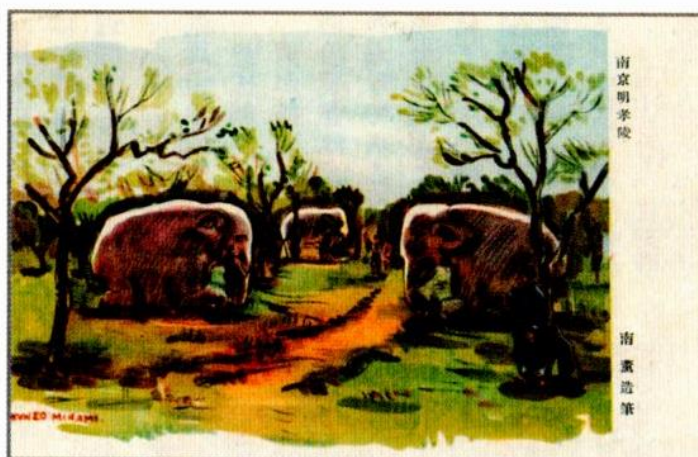
描かれている。この絵葉書のスケッチがどの日に描かれたかは定かではないが、一三日に鉛筆のスケッチのほかに水彩も描いた可能性もあれば、一四日の浴後に雨が上がった間にホテルのバルコニーから描いた可能性もある。四月二一日の日記には、南京の明孝陵を訪れたことが記されている。

「紫金山天文台に上る。……明孝陵は全じ山の麓ニ在る。石造獅子（座せるもの一對、立てるもの一對）駱駝二對（全前）、象二對（全前）、文人（全前）が陵門に導く。自動車から下車して石人をスケッチ又た撮影する」(三四頁)(9)

翌日の二二日の日記も明孝陵での写生活動に触れている。

「晴。稍稍暑。起きた時恰度太陽が紫金山の南方から眞赤に出た處であつた町はもやに青白い。日本時間六時一寸前であるから内地の五時前の光景に当たる。司令部から自動車 came。明孝陵迄行く。私は文人の石人二体を#12に画く事にした」(三五頁)

南が描いた四枚目の絵葉書の図版内容は、明孝陵の石象である。四月二一日と二二日の日記には南が石人をスケッチすることだけが記されているが、その時に石象のスケッチも描いた可能性がある。



④



⑤

陽湖」という湖に辿り着いた。その日の日記には次のことが書かれている。

「二十分も河下に下って鄱陽湖の入口へと右に曲がる。……水色が次第に茶褐を減ずる。……暫らくして湖面が広くなった所に大孤島、(□島、大姑山)が現れる。揚子江の小姑島に對照されるものである。塔や寺等を島の上や山腹に見る」(四〇頁)

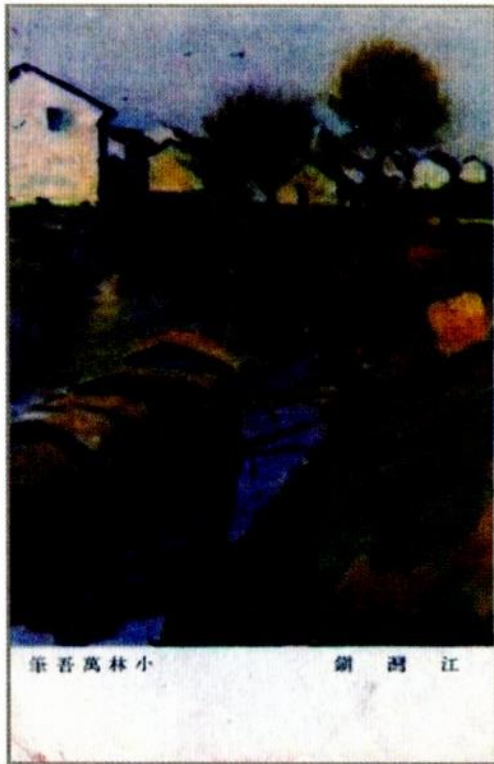
四月三〇日に一行が船で九江から星子に移動する間に「鄱

二―二 小林万吾
小林万吾(一八七〇〜一九四七)は、従軍当時六八才の高齡であった。最後は体調不良で南より三日早く帰国したが、旅行中は基本的に南と同じ日程で移動していた。一行が上海に上陸した二日目(四月五日)の日記には次のような記述がある。

「七時朝食。九時前片村部隊より自動車が来る。……江湾鎮の競馬場に行き、其の付近で画く事にする。#8に高い塔と前の壊れた家を画く、小林氏も鈴木君も近くで初める。」

発見された五枚目の図版は、葉書入れ封筒の表紙裏に印刷された⑤「鄱陽湖大姑山景」である。湖水の色、島に見える塔や寺など風景の内容は『日記』の記述と一致している。

藤崎(二〇〇五、一九頁)の注一三によれば、南薫造が日本に戻った七ヶ月後の一二月二六日に「陸軍省恤兵部に川上中佐を訪ひ絵端書用としてスケッチ四枚色紙二枚を提出」とあるが、軍事郵便として印刷された一枚の船上兵士の姿、四枚の中国風景は提出された六枚中の五枚ではないかと推定される。



⑥

…：雨田君の案内で午后は江湾鎮の町迄行って見る。小舟を入れるクリークに沿ふ町で非常に面白い。町には市が立ち群衆で一パイである。人家、白壁等実に宜い。中々□まって居て何個でも大作が出来相に見受けられる。柳は新菜、菜種の花咲き、草の緑も鮮やかで点景人物も好適である」(二二頁)

小林万吾が描いた絵葉書は五枚発見されているが、『日記』内容に関連するものはその内の四枚である。一枚目は⑥「江湾鎮」である。絵葉書の図版内容は「小舟を入れるクリークに沿ふ町」や「人家、白壁」という『日記』の記述に合致したような風景である。『日記』によれば、南、小林、鈴木一行の上海滞在の日数は合わせて一週間だったが、その中で、

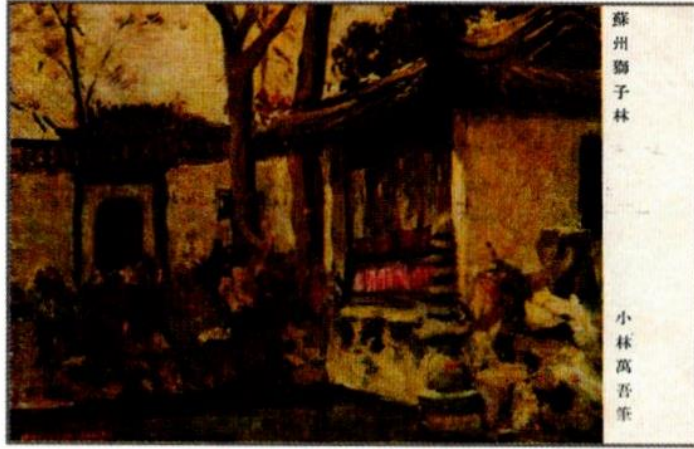
江湾鎮附近でのスケッチについての記述は四月五日の日だけである。それが事実だとすれば、⑥はその時に描いた、またはその時のスケッチをもとに制作した一枚ではないかと推定される。四月八日の日記には一行が蘇州の獅子園を訪れたことが記されている。

「町には朝市が立って居て非常な雑沓である。其の間を抜け狭い露路の様な通りを漸やく人力車が通り抜けつゝ獅子園に行く(10)。…：牡丹はまだ赤い新芽であったが此の竹垣を透して見る盛の頃は定めし美しいものであらう。寫真を撮った里、スケッチしたりして、一時間位居て出る。再遊寫生の機が望ましい」(二五頁)

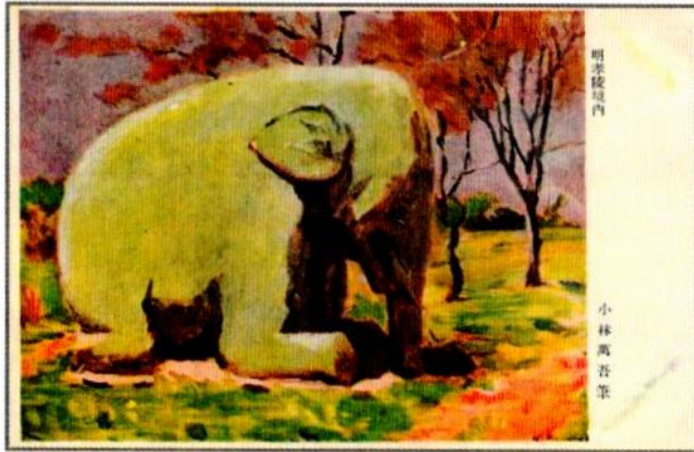
小林が描いた二枚目の絵葉書は⑦の「蘇州獅子林」である。『日記』には小林の行動については明記していないが、おそらく一行は同じ場所で一時間ぐらゐを写生などに費やしたのだろう。獅子園に関する記載は四月八日の日記だけである。小林の⑦「蘇州獅子林」はその日の写生活動にかかわる一枚ではないかと思われる。

四月二二日の日記には一行が南京に着いた後の動向が記録されている。明孝陵の写生に関して前節の引用文「私は文人の石人二体を#12に画く事にした」の直後に次の記述が続く。

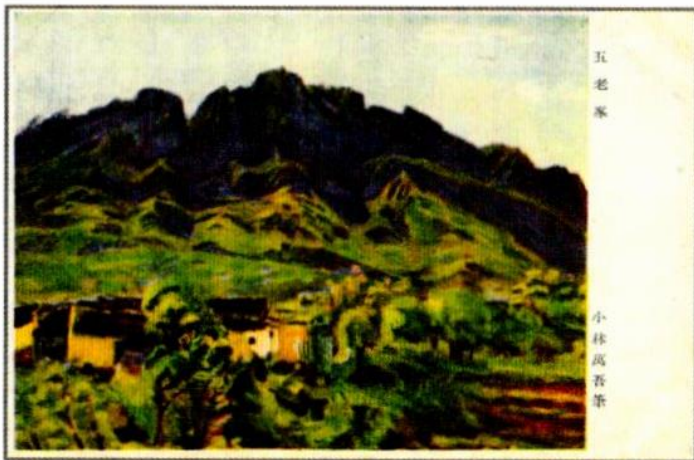
「太陽は中々烈敷射て空には殆ど雲が無い。鶯、きじが



⑦



⑧



⑨

切りに附近で鳴く。十時頃から二時迄画き続ける。小林氏は石象を画くと□□って別れた」(三五頁)

四月三〇日に一行は船で江西省に向かった。その日の日記には次のように記されている。

この日の日記には、小林が石象を描くという写生活動が明確に記されている。三枚目の絵葉書⑧「明孝陵境内」はまさに『日記』の記述通りの一枚と言える。石象のどっしりとした重量感が伝わり、明るい色彩と石象の真下の陰影は『日記』記載の真昼の強い日差しを浴びる情景を彷彿させる。

「廬山は常に右舷に沿って其の変化ある山形を仰ぎ見る。五老峰の塊が左の角に現はれて偉観を呈する」(四〇頁)そして、翌日の日記には、小林一行の動きが記録されている。

「五月一日。晴。暑。小林氏は五老峰を画き度いと云って、鈴木君、石割氏、渡辺一等兵及び衛兵二名と共にトラックで八時半出発。……六時頃小林氏等帰着」（四一頁）

中国には五老峰という名前の山は三ヶ所あるが、江西省の廬山五老峰はその一つである。小林が描いた四枚目の絵葉書⑨「五老峰」は五月一日の写生活動を裏付ける一枚である。小林は帰国後絵葉書用のスケッチを全部で何枚提出したかは不明だが、発見された五枚中の四枚は『日記』の記述内容を裏付ける図版であることが明らかである(11)。

二二三 鈴木貞三

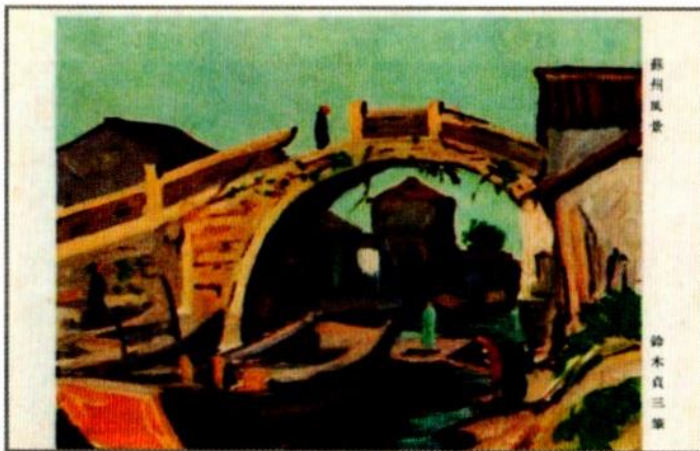
鈴木貞三は当時二七才で小林の助手として南薫造に同行していた。一行が蘇州に着いた後の四月八日の日記には次のような記述がある。

「八日。晴。暖 六時半起床。……起き出て宿の左の狭い町を通過して河ふちの町に出る。……左に曲って行くと古い石橋がある。地図の上で見ると上津橋とあるのに相当するものらしい。橋の積石の間から灌木が生へて居た里、かづらが垂れて居たりする。欄かんの一部も壊れて居る。多分多くの画家に画かれた橋であらうと想はる。橋の前後から、また兩岸から眺めたが中々好い。明日は之れを画き度いと思ふ。……橋の南の側の岸辺で八ツ切の水彩を二枚画

いた。河に沿ふ人家が甚だ引付けた。楊柳は出たばかりの新芽をポーッとさせて居る。小林氏、松林君、鈴木君は油絵、私と雨田君は水彩を画いた」（二四―二六頁）

鈴木貞三が描いた図版は三枚見つかっている。二枚は絵葉書に、一枚は葉書入れ封筒の表紙裏に印刷されている(12)。二枚の絵葉書の内一枚は⑩「蘇州風景」である。画面には、積石の間から植物が生え、欄かんの一部が壊れた古い石橋が描かれている。蘇州は水の都で橋が多い町である。鈴木が描いた橋は、南が言う「上津橋」と同一の橋かどうかはさらなる検証が必要であるが、⑩が『日記』記載の蘇州滞在中の写生に密接にかかわる図版であることは間違いないだろう。

『日記』の中には、鈴木が頻繁に登場し、その言動に関する記述も他の人物より詳しい。四月六日の日



⑩

記には上海附近の龍華寺を訪れた時のことについて次のように書かれている。

「龍華寺に案内される。其塔は荒れては居るが美しい。……見下ろすと村も甚だ美しい。道路を距てて龍華寺の伽藍が物淋しく立ち併ぶ。其盛時を思ひやらるる。鈴木君は夢の世界の様だと度々繰返して嘆称する。實際白日の夢と云ふ感がする」(二三頁)

『日記』には鈴木貞三が風景に嘆き、感動する姿が記されているが、哀愁が漂う古い橋の下に無邪気な子供の姿が点景として描かれた図版⑩には若き絵書き自身の心の世界が映し出されているように思える。

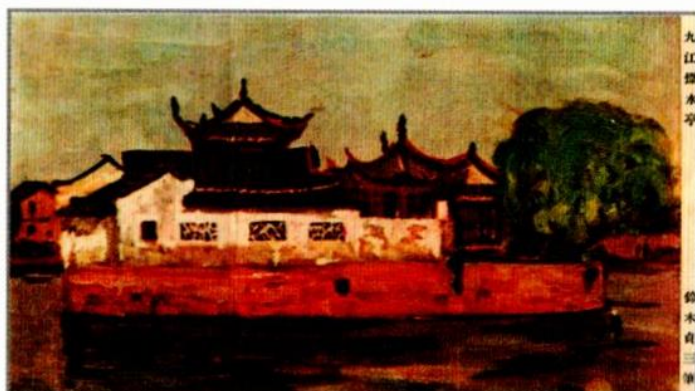
翌日の日記には鈴木木の動きについて次のように書かれている。

「四月九日。曇。和。……小生は昨日見て置いた橋を画く準備をする。松林君も此橋を何處からか画くと云ふ。小林、鈴木雨田の三君は寒山寺に向かふ」(二六頁)

鈴木木の二枚目の絵葉書は図版⑪で、蘇州の寒山寺の境内を描いたもので、鈴木などが「寒山寺に向かふ」という『日記』の記載内容を裏付けるものである。



⑪



⑫

四月二八日の昼頃、南一行は江西省九江の港に到着した。翌日の日記には、次のような記録がある。

「宿の近くの喫茶店に這入る。之れは九江第一の店構へであったが店内一パイの兵隊で其の騒々しさは言語に盡きる。宿に帰って宿の裏の廊下から直ぐ眼の前に見へる湖中の煙水廟を水彩で画く」

鈴木の三枚目の図版は九江市の甘棠湖に浮ぶ煙水亭を描いたものである。『日記』では南自身のスケッチにだけ触れているが、図版⑫「九江煙水亭」はおそらく鈴木が南と同じ場所「宿の裏の廊下」でこの風景を描いた、またはその時のスケッチをもとに制作したものと推測される。

『日記』には「助手は絵葉書製作の絵画一組を提出寄贈する事也」(二〇〇頁)とあるが、鈴木が描いたこの三枚は従軍旅行終了後に提出されたものではないかと思われる。

三 むすび

本論は、南薫造の『従軍日記』に基づき、現存の戦前絵葉書の図版を整理し、照合することにより、歴史の闇に埋もれていた戦前美術史の一部分に光を当てることができた。『日記』は散見される戦前絵葉書に脈絡を与え、関係性を持たせると同時に、絵葉書も『日記』に図版による証拠資料を提供することになった。

南薫造一行の従軍活動が『日本美術年鑑』(一九六九)所載の美術年史の従軍記録や飯野(二〇〇五)および針生他(二〇〇七)の戦争美術関連年表(長嶋圭哉作)に記載されていないように、従軍画家の誰がどこに派遣され何を描いたなどの活動内容の大半は依然闇に包まれている。従軍画家の活動や役割について議論するためには、軍部の要請下で献納された戦争画作品だけでなく、画家たちの取材活動などの創作プロセスにも目を向ける必要がある。従軍活動の詳細な事実が明らかになってはじめて、われわれは当時の社会的要

請に応えるための作品と、画家が画家たるゆえんの創作活動や美的感動によって生まれた作品を正確に捉え、評価することができるとは思えないかと思う。

注

- (1) 飯野(二〇〇五)が蒐集した記録データに基づく筆者の統計結果による。陸軍と海軍の両方に複数回、複数地域に従軍した人も少なくなかったため、のべ人数は更に膨らむ。
- (2) 傍点、省略記号は筆者による。13は原注番号である。
- (3) 新宿区美術会会長を務めた鈴木貞三氏は二〇〇九年に九七歳で亡くなった。一九三八年従軍時の年齢は鈴木氏の享年に基づく。
- (4) 原文中の改行スラッシュの省略と傍点は筆者による。引用頁の出典は藤崎(二〇〇五)論文を指す。以下同。
- (5) 封筒には「軍事郵便 陸軍恤兵部発行 共同印刷株式会社印刷」と記されている。
- (6) 従軍記録資料の中に、一九三七年一月一日東京美術学校油画科出身の城信義が崑山戦において戦死したという記録が一件あった(飯野二〇〇五、一三頁)。鈴木の言う同級生かどうかは不明だが、関連記録はその一件のみなので、その可能性は高い。
- (7) 日本国内風景の一枚には神社の手洗い場が描かれている。発表された『日記』では言及されていない内容である。他の五枚の裏には「陸軍恤兵部発行」と記されているが、この一枚には「陸軍美術協会発行」と記されている。他の五枚と同じ時期に提出された六枚中の一枚なのかどうかは断言できない。

- (8) 「#12」は作品サイズを表す番号と思われる。
(9) 「全」は「同」の異体字である。
(10) 『日記』の手書き原稿は確認できないが、「獅々園」は「獅子園」の転写による文字誤認の可能性がある。
(11) 小林万吾の残り一枚の絵葉書は「遼東運動場附近」である。中国東北地域の風景なので、今回の中部地域の旅程とは直接関係がないようである。
(12) 封筒には「軍事郵便 陸軍恤兵部発行 共同印刷株式会社印刷」と記されている。

参考文献

- 飯野正仁 二〇〇五 「戦争に征った画家たち」『あいだ』(一六〇—一九号)「あいだ」の会
桜本富雄 一九九三 『文化人たちの大東亜戦争』青木書店
高階秀爾 一九九六 『日本絵画の近代』青土社
針生一郎他 二〇〇七 『戦争と美術一九三七—一九四五』国書刊行会
藤崎綾 二〇〇五 「南薫造『従軍日記』」『広島県立美術館研究紀要』一七—四九頁
東京文化財研究所 一九六九 『日本美術年鑑・美術界年史(彙報)』<http://www.tobunken.go.jp/japanese/nenshi/menu.html>

(外国語学部教授)

神奈川大学評論

第70号記念号 特集・文明史的転換点 ——「3・11」以後を生きること

対談 「3・11」以後の日本社会の希望をめぐって
——地震・津波から原発事故まで——
大澤真幸／平野啓一郎

評論 島蘭進・関曠野・鎌田慧・大西隆・中山茂
内藤酬・的場昭弘・石井伸一・川村湊

詩 口笛……小池昌代

エッセイ 自然災害と「カント的」幻想……山折哲雄

論文 戦後断絶期の中国観 1946—1952 (14) ……田畑光永

論壇時評 夜の台所で……尹健次

神奈川大学広報事業課 TEL 045-481-5661 FAX 045-481-9300

定価 850 円(送料別) 年 3 回発行 <http://www.kanagawa-u.ac.jp> でも注文可能